
銀の悪魔

nico

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の悪魔

【Nコード】

N8943F

【作者名】

nico

【あらすじ】

満天の星の元、夢げに佇む彼は、彼女を想う。19世紀ごろの北欧を舞台にしたお話です。

鋭利な青白い三日月が闇夜に浮かんでいた。星は満天を覆いつくしている。彼は見上げて空を目に焼きつけていた。瞬く小さな星を目に焼きつけていた。

風が吹いていた。辺りは木々のさざめく音に包まれている。彼は目を閉じ、耳をすませた。葉の奏でる音を耳に刻んだ。聞こえる音は波を思わせ、寄せては返す海を思った。彼女が言った言葉を思った。

「後悔はせぬのか？」

低く、くぐもった声。囁れた声。フロックコートに身を包む男は、対峙する彼を哀れみの目で見ている。

彼は口元に笑みを浮かべた。「後悔はしない」

男は頷くと、手を振り上げた。いつの間に握ったのか、短刀を手をしている。

「最後に残す言葉はあるか？」切っ先を彼に向けて言う。

彼は地に膝を落とし、うつむき、黙って首を振ってみせた。

「何も無いのか」静かな声。落ち着いた、悲しみを含む声。「本当に何も無いのか」

彼は顔を上げ、男の目を真直ぐ見据えた。

「嫌な役をさせてしまっね」

「ああ」男はゆっくりと瞬きし、開いて言った。「嫌な役目だ」

「すまない」

夜半過ぎ、石畳を彼は走っていた。かなりなスピードにもかかわ

らず、不可解な事に息は全く切れてはいない。そればかりかさらにスピードを上げていく。中世より変わらぬ街に、彼の足音のみが響いていた。

マントがはためく音が聞こえる。風化した石畳がずれる音が聞こえる。道行く人々は反応し、足を止めて彼を見た。ある者は息を飲み、ある者は再び見ようと振り返る。彼はとかく美しかった。闇夜に現れた、土着の神話の妖精のよう。

月光に照らされ、彼の髪は柔らかに銀色に縁どられていた。波打つマントは漆黒で、夜の王者を思わせる。夢、幻影。目にする人は彼に魅入るしかなかった。彼は流し目で彼らを一瞥し、笑った。

群衆の中、誰にも勝り一際彼を見つめていた者がいる。ボロボロのドレスを纏った女。元は名のある貴族なのかもしれない。豪華なドレスだけれど不様に穴が飽き、煤け、白が茶褐色に変色していた。彼はスピードを緩めて止まり、女の元に歩んでいった。人々は示し合わせたように彼らに顔を向け、注目した。

一步、また一步、彼はしなやかに近づいていく。女は目にする人間離れした彼に恐れを感じた。が、吸い込まれそうなほどに澄んだ青い瞳から目が離せない。いかなる努力をしても離せそうもなかった。

「あなた、人？」無意識に口にしてしまう。

「さあね、どうだろう」彼は触れそうな程、女の側に寄った。「でもどうして？」

女は恥ずかしそうに俯いた。

「あまりにも……その、美しいから。人じゃないみたいに」

彼は俯く顔を覗き込む。目を逸らす事は許さないとばかりに。

「ねえクレア、そう思う？ 僕は美しい？ 人じゃないみたいに」

「え？」

顔を上げ、クレアは目を見開いた。目は左右にせわしく動いている。「何故私の名を知っているの？」

彼はにんまりと微笑んだ。

「君は目に映る僕の姿を信じるの？ 疑いもせず、そのまま受け止める？ 造られた美だとは思わない？ 君たちに美しく見えるよう、誘惑できるよう、与えられた美だとは思わない？」

クレアの薄汚れた顔は歪んだ。

「何が言いたいの？」

意味深に彼は睫を伏せてみせた。

「君は再び僕に会う」顎を引き、上目遣いで彼女を見る。「望まなくても」

驚くクレアを後目に、彼は踵を返して歩き始めた。集まる人々は皆、彼を避け、道を開けていく。その行動は命令を受けたように統率がとれていた。彼の前には道がひらけた。

再び彼は走りはじめた。れんが造りの古びた街に足音がこだまする。より美しく、より幻想的に。

「この街は陰気だな」

とある一室。大聖堂の装飾的なトレサリーを眺めながら、男が言った。その部屋は壮麗なバロック様式の大聖堂を間近でのぞむ事が出来る、上流階級用にしたためられた部屋。聖母が描かれたステンドグラスは、内部の柔らかな灯火に照らされ、闇夜にぼんやりと浮かんでいた。

「陰気だよ。民衆は王侯貴族に虐げられ、身も心も蝕まれている。生きながら死んでいるみたいだ。話す気力もないのだろう。街は静かだ。僕の足音でさえ響き渡るくらいに」

男は視線を扉に移した。「それは楽に仕事が出来そうだな」

部屋の扉は開け放たれている。佇むのは彼。まだ歳若い青年の姿。フロックコートを脱ぎながら、男は懐中時計を手にした。

「10分の遅刻だ」

「走って来たから少し遅れた」

「走る？ 何故」男はチャラチャラと時計のチェーンを握りしめる。

「人間みたいだ」

「僕は極力、人と同じ生活をしている」

男は鼻で笑った。「何の為に」

「人は警戒しなくなる。そして僕は仕事がしやすくなる」

男は懐中時計を彼に投げた。チェーンは光を帯びてチカチカと煌めいた。「だが、時間を常に気にする事だ。遅れは許されない。失敗は許されない」

彼は片手で軽々と時計を掴んだ。「標的は見つけた」鈍く光る古い時計。金の時計。彼はコートのポケットに押し込んだ。

「ほう、もう見つけたのか」

「まあね」

コツコツと足音を響かせ、彼は窓辺に立つ男の隣に歩いていった。「無駄に派手だね」大聖堂を見上げて言う。「人は何故かくも祈るのだろう。神が彼らのために動く事はないのに。人はいつ気付くのだろう。願うだけ無駄だという事を」

男は目を細めて大聖堂を見つめた。象られた十字架を見つめた。

「人は愚かな生き物だ。自ら動かぬくせに、ただ願えば叶うと思っている。他力本願というべきか。見返りを求めず助ける者などいるものか。神は無慈悲な生き物だ。そして、我らは人の心を写す鏡だ」

クレアは古い空き家の屋根裏に住んでいた。彼女の一日はロザリオを手に、膝を折り、神に祈りを捧げる事から始まる。今日も彼女は神に願った。救いを求めた。屋根の隙間から差し込む朝の陽光は、

帯となつて彼女を包み、その暖かな日ざしに、今日こそ願いが叶うかもしれないと、一抹の期待を抱いていた。

彼女がさもなく屋根裏に住むようになったのは、二カ月前の事。それまでの彼女は堂々たる様で、大きな屋敷でたおやかに過ごしていた。顔に浮ぶのは何も知らない無垢な微笑み。輝くばかりの純粋な笑み。陽を受けて輝く純白のドレスは彼女の白肌を引き立てて、人形と見まごうほどに美しかった。

だが、その白いドレスは茶色く煤けてここにある。彼女の艶やかな絹と見まごう長い髪も、ボサボサに乱れてここにある。彼女の顔には微笑みなどなく、あるのは生活に疲れ果てた苦悩と疲労と悲しみだ。

カタリ。背後で音がした。クレアは目を閉じたまま、ロザリオを握ったまま、神に祈りを捧げたまま、呟いた。「誰？」

答えはなかった。が、気配はある。彼女はもう一度口にした。「誰がいるの？」

「さて、どう答えれば良いのだろう」

透きとおる声。聖歌隊を思わせる声。クレアは恐れつつも振り向いた。目を見開いた。息を飲んだ。

「礼拝を中断するなんて。君は敬虔な信者かと思っていたけれど」
いつの間にあられたのか、足を組み、彼は頼杖について椅子に座っている。「どうやら違うみたいだ」

見覚えのある美しい顔、見覚えのあるマント、見覚えのある衣装。クレアは戦慄した。体を震わせた。

「鍵がかかっていたはずよ……」眉をひそめた。「なのに、何故？」
彼は首をたてに振った。「鍵はかかっていた」肩をすくめた。「でも、僕には関係ない」

クレアは一つしかないドアを見た。錠は未だにかかっている。小刻みに震える手で口元を覆った。

「……鍵はかかったままだわ」

彼女は信じられない出来事に、唾を飲み込み、深くまばたきをし

た。が、目を開けた途端、瞬時、彼は目の前にいた。目と鼻の先、笑いながらしゃがんでいた。

「きゃあ！」

膝を折ったまま、力無く後ろに倒れ込む。彼は荒々しくクレアの腕を掴むと引き起こした。

「あの時、君は僕を見ただろう？ 君は選んだ。そして僕は君を見た。僕は選んだ」

「何を――」

クレアは彼の手を振り解こうとした。しかし徒労に終わった。彼の力は見かけによらずあまりにも強い。

「クレア・モンスレー、君は身分の違う男と駆け落ちをした。家宝の宝石を持ち、男に言われるままに家を飛び出した。そのまま屋敷に残っていれば、少なくとも今よりは幸せだったはず」彼はクレアの耳元に口を寄せた。「哀れだね。世間知らずの君は何も知らない」

クレアは慌てて彼を突き放した。「何なの！？」

かまわず彼は続ける。

「駆け落ちをした結果がこれだ。男に捨てられここにいる。親からも勘当されてここにいる。ねえ、知ってる？ 男は初めから君の家の宝石が目当てだったんだ。君に対して愛はなかった。男が欲しいのは宝石だけ。あのルビー、ピジョン・ブラッドははかり知れない価値を持つ。男はもうこの街にはいないよ。宝石を持ち、遠くの街にいる。海に見える街」

クレアは青ざめ、ただ彼を見た。見つめた。真直ぐに見る事しか出来なかった。

「まだ祈り続けるつもり？」彼は再び彼女の耳元で囁いた。「男が戻って来ることを神に祈る？」

ロザリオを持つ手はカタカタと揺れていた。「本当なの？ あなたが言った事……本当？」

「本当だよ」彼は彼女の手のロザリオを見やり、彼女の肩に手を置いた。「僕は正直者だ」

「信じ、られない……。嘘よ」

クレアは彼の手を払った。「嘘だわ、嘘に決まってる！」

彼は払い退けられた手で、銀の髪をかきあげた。

「嘘だと思うなら思えばいい」鋭く彼女を見据えた。「毎日神に祈りを捧げ、男の帰りをここで待つといい。叶わない願いに無駄に月日を費やすといい」

「やめて！」叫んだ。「あの人は私を愛していると言った」ひと粒、涙がこぼれた。「ここを去る時、戻ってくると言った」もう一度、確かめるように。「戻ってくると言った」

「なら、何故彼は君の全ての宝石を持ち出したのだろう。君の持参した見事なドレスも残っていない。絹のケープも、ビロードのローブも。何故愛する人に何も残さず去る事が出来るのだろう。何故ひどい仕打ちが出来るのだろう」

問いに答えず、彼女はうずくまった。子どものように小さく見えた。

彼は立ち、彼女を見下ろしながら魅惑的に笑みを浮かべた。

「ねえ、君は知っているだろうか。神は何もしてくれない。君の声に耳を貸す事はない。祈り続けても何も変わらない」睫を伏せた。

「だが、僕は違う。君の声に耳を傾け、君の望みを叶えてあげる」

彼は未だうずくまるクレアの手をほどくと、ロザリオを取り上げた。かわりに懐中時計を握らせた。

「神ではなく、僕に救いを求めるならば、午後到大聖堂に来るといい」

彼女は目に涙をたたえ、顔を上げた。

しかし、いない。すでに彼の姿はない。忽然と消えてしまった。

「そんな……」

空しく声のみが響いた。彼女が握った手を開くと、金の時計は時を刻んでいた。

「勝手な事をしてくれたものだ」

少々怒りを帯びた声。囁れた声。男は煙管を口に含み、おもむろに燻らせた。「あれは結構気に入っていた」

「ちゃんと返すよ」彼は自信に溢れた顔で男を見返す。「君の時計は戻ってくる。必ず」

大聖堂内の長椅子に座り、二人は神と向き合っていた。彼らの前には大勢の信徒が座り、祈りを捧げている。

「しかし笑える。あの絵を見る」男は壁に立て掛けられた大判の絵画を指差した。数人の神の使いが聖母と共に描かれている。「あの姿、神というより我々だ。我々に似ている。人は知らぬ内に我らの姿に幻想を抱いている。これが笑わずにいられるか」

彼はちらりと絵画を見ると、聖書を読み上げる司教に視線を移した。「人は何故あも神に祈るのだろうか」男に問うた。

「人は弱い生き物だ。常に目に見えぬ不安に脅えている」男がぼそりと言う。「不安を紛らす為に祈る。神に生かされていると考え、苦しみと戦う勇気を得ようとしている。安らぎを得ようとしている」

彼は一般席ではなく、前方の一際豪華なアール・デコ調の椅子に腰掛ける貴族の夫婦に目を付けた。ふくよかで贅沢な衣装の彼らからは苦しみなど感じられない。

「なら、裕福で幸福な人間はどうだろう。彼らが神に祈る理由は？」

男は含み笑いをした。「人はおかしな生き物だ。幸福が続けば、今度はなぜかそれが不安に繋がる。その幸福を失いたくないと願う。疑心暗鬼な生き物となる。現状に満足すれば良いのに、さらに欲張りに高みを目指す。そして祈る。おかしな話だ」

「欲望か」彼は目を閉じた。「その魂は不浄だ。汚れた魂はそれなりの価値ではない。僕はそれには用はない。僕が欲しいのは純白の魂だ」

「人の魂などどれも同じだと思うが」

男は手に持つ杖でこつこつと床を叩いた。「それがあの女というわけか」

「そうだよ」彼は読みもしない聖書をパラパラと捲り、一枚破いた。それはヘブライ語で書かれたヨハネの黙示録。

「ところで君は、自分が悪だと思う？」

彼の手の中で、紙は灰に姿を変えた。ボロボロと崩れていく。

「俺には悪の定義が分からん。誰の主観によるものか。誰かにとつての悪ならば、俺は少なからず悪なのだろう。……お前はどうか考えている？」

「さあ、分からない」銀の髪を耳にかけた。「でも僕は知っている。僕らは人の敵だという事を。僕がどう思おうと、彼らにとって敵。それは揺るぎない事実」

「それはそうだろう」男はポキリと指の関節を鳴らした。「我らは人にとつての試練だ。我らは“妨げる者”という意味を持つ。我らの行動は全てにおいて人を惑わし、試し、陥れるものでなければならぬ。そして人は我らという存在に恐怖する」

彼は真剣な眼差しで男を見た。

「その役目を果たさない場合、僕らはどうなる？」

「当然、淘汰されることになる。仲間の手によって粛正され、その存在は無となる」

「無、か」

彼は静かに言った。「仮に僕が無になる時は、君の手で――

フロックコートの襟を少しばかり立て、男は彼に耳打ちをした。

「話は終いだ。女が……クレアといったか。来たようだ」

クレアが大聖堂に足を踏み入れたのは、午後の礼拝がちょうど終わった頃だった。席を立ち、出ていく人々とすれ違い、横にずれて道を開けた。自らの汚れたドレスが恥ずかしくて、彼女は終始うつむいていた。

途中、フロックコートの男が彼女の前で止まった。驚き、ぎこちなく顔を上げた。

「失礼」断わりを入れた男は彼女の肩に触れ、小さな木の葉をとって見せた。「木の傍を歩かれたのですか？」

端正な顔の男。欠点などない完璧な美がそこにある。冷たく感じる程の凍てついた美貌。

「……ありがとうございます」彼女の胸は早鐘を打ち始めた。とてもない不安と圧迫感に襲われている。

「どういたしまして」男は手に持つシルクハットを頭に乘せた。「レディ、ごゆっくり」

ふわりと鼻孔をつく香水。男は杖を揺らしながら、しなやかに扉の向こうに消えていった。

彼女は男が去った後も、目が離せずにいた。底冷えのする、得体の知れぬ異様な空気。やがて一つの言葉が脳裏に浮かんた。――あれは人なのだろうか。

「やあ、来たね」

屈託のない笑みを浮かべながら、天使さながらの麗しい青年は彼女の目の前に歩んできた。ゆつくりと。

美をたたえて儚く消える、雪の結晶のような青年。暖かくなれば消えてしまう、一瞬の繊細な夢。しかし彼もまた不気味ともいえる雰囲気をかもし出していた。

「僕に救いを求めに来たの？」

クレアは首を振り、否定した。

「これを返しに来たの」おずおずと懐中時計を差し出した。「あの、私の口ザリオを返して欲しい」

「これ？」彼はポケットからロザリオを取り出し、鎖をつまむとチャチャラと揺らした。

彼女は彼の手から取るうとしたが、彼は一足早く再びポケットに戻してしまった。

「その前に君に見せてあげよう」彼は彼女の手をとった。「真実を」強い意志を持ち、クレアは申し出を断ろうと思った。真実など知りたくはなく、ずっと夢見ていたかった。けれど彼には不思議な魔力があるのか、手を離すことはできない。目を離すことはできない。向き合い、青く澄んだ瞳を見てみると、彼女は気が遠くなる思いがした。視界は二重になり三重になり、モノクロになりカラーになり、にじんで淡く消えてしまう。

——あなた、何を……

声にはならない。彼女は意識を失ってしまった。

彼は彼女が倒れる前に抱きかかえると、何もなかったように外に繋がる扉へと向かっていった。

鼻腔をくすぐる嗅いだ事のない匂い。微かにザザザと音がする。

風が吹いているのか、髪がそよぐのを感じる。クレアは違和感に重い瞼を開けて、働かない頭を動かそうと試みた。天井を見た。見た事もないシャンデリアがぶら下がっている。

「起きた？」

彼は椅子に座り、静かに彼女を見ていた。彼女ははっとし、辺りを見渡した。知らない所だ。西日に照らされ、辺りは赤く染まっている。

「ここは？」彼女は天蓋のあるエキゾチックなベッドに座っている。
「ここはどこ？」

「君の知らない街」

彼は水の入ったワイングラスを彼女にそつと手渡した。「この街に君を騙した男がいるよ」

動揺に、彼女の手を持つ水がこぼれた。

「騙しただなんて！」

彼女は憤慨したが、彼は気にも止めなかった。「出かけるよ」

穏やかに言つて背中を見せた。彼女は水を一口飲むと、黙つて彼に従つた。

その街はクレアが住んでいる街とはずいぶん違つていた。建物はほぼ新しく、歴史ある建物はごくわずか。白を基調にした街並は、陰鬱ではなく陽気な雰囲気にあふれている。

壁に描かれた文字はラテン語で、彼女は読む事ができなかった。

ここは外国なのかもしれないと、怪訝に眉をひそめていた。道行く人々の格好も、彼女の見なれたそれではない。

「待つて」彼の歩みはとも早く、時折走らねばならない。クレアの息は切れていた。「もう少しゆっくり歩いて」

飄々たる様で彼は振り向くと、ふいに彼女の腕を掴んで物陰に隠れた。

「いきなり何なの？」

「静かに」彼は人さし指を口に当てた。「そろそろ男がここを通る」クレアは唾をごくりと飲み込むと、彼に言われるままに口をつぐんだ。

彼が言った通り、“男”はこちらのほうへ歩いてきた。クレアにも彼にも気付く事はなく、笑い声をあげて楽しそうだ。男の隣に黄色のドレスのなめまかしい女がいて、男は女の腰に手をまわしていた。

「トマス……」

クレアは誰にも聞こえぬように呟いた。ガタガタと体を震わせ、

目からは滯となって涙が落ちていく。

彼はついと彼女の耳もとで口を動かした。

「男の名前はトマスではないよ。トマス・クレスは偽名だ。本名はジャック・モア。そして女はキャサリン・トワレス。女は男の長年の恋人だよ」

クレアの顔は蒼白で、声をあげずに、虚ろにただただ泣いている。
「男は詐欺師だ。君のような世間知らずの女性を騙し、金を得、女と贅沢に暮らしている。詳しく言えば、今まで15人が騙されている」

「嫌っ」

クレアは触れる程に近い彼の体を突き飛ばし、道へ飛び出そうとした。が、咄嗟に彼に腕を掴まれる。

「愚かだね。君が男の元へ行っても、男は他人のふりをするだけだ。男は君が知らないラテン語を話すだろう。君は変人扱いされるのが関の山」

「離して！」

彼はにんまりと笑った。

「ねえクレア、契約しないか？ 僕はこれから男をどん底に突き落とそう。再起不能にしてあげよう。君が望むなら隣の女もついでに苦しめよう。男が憎いだろう？ 隠しても無駄。僕には君の憎しみと悲しみといら立ちが痛い程伝わってくる」

クレアは目を見開いて彼を見た。闇にまみれた呪の言葉が頭に響いている。

「苦しいだろう？ 辛いだろう？ 君がこれほどまでに苦しんでいるのに、男はのうのうと人生を楽しんでいる。おかしいと思わないか？ 不公平だと思わないか？ 君がどれほど神に祈ろうと、男は変わる事はない。この先、君のような被害者が出続けるだけだろう。許せる？ 君の苦しみを彼に味あわせたくはない？」

言いながら彼は右手を差し出した。

涙を拭い、彼女は彼の手にもくれず、空を見上げた。空には新

月に向かう青白い鋭利な月が浮かんでいる。その様、刃物のようだった。

手を差し伸べたまま、彼は見ていた。儚げな彼女の横顔を見つめていた。

月を見ながら彼女は呟いた。

「あなた……悪魔？」

ザザザ……。

寄せては返す波を眺め、クレアは黙って浜辺に座っていた。初めて嗅ぐ潮風も、初めて見る海も、彼女の慰めにはならず、涙は途切れる事を知らない。

海は街のほど近くにあり、徒歩でたやすく行く事が出来た。暗がりの中、広大で雄大な海は、ゆるやかに波打ち、音を轟かせていた。程なく風は止み、海は凪いだ。

雲が晴れ、黒々とした海には、ゆらゆらと細く白い月が映り込んだ。彼はそれを見、彼女のようだと思った。

「本当にそれでいい？」

彼女の後ろに佇み、変わらず海の中の月を見ながら言った。「彼を苦しめなくていい？」

彼女は頷いた。「いいの」

「君はこの現状に納得できる？」

「納得するしかないわ」

涙を袖で拭い、彼女は立ち上がった。ゆっくりと海に向かって歩いて行く。

「あの人を恨んでいないと言えば嘘になる。でもね、私が彼を愛したのは事実。愛する人の不幸を願う事はできないわ。あの人が不幸

になる姿は見たくない。だから仕方がないと諦めるわ」

不可解な言葉に彼は首を傾げた。

「君は今のまま不幸でもいいの？ あの手はこの先不幸にはならない。それを許せる？」

「ええ」

「愛しているから？ ひどい事をされてもまだ男を愛しているの？」

彼女は振り返り、彼を見た。「ええ」

「無償の愛というやつか。僕には分からない、知りたくもない」

「あなたは知っているはずだわ」彼女は言葉を選んだ。「その……愛するという事を」

彼は馬鹿げているとばかりに鼻で笑った。

「知らない」

「あなたは人ではないわ。……悪魔でしょう？」

「うんとは言わない」

「違うとも言わないでしょう？」

彼は頷いた。「まあね」

「あなたは人でなくても、人の痛みが分かるのよ。だから私に近づいた。……違う？」

「痛みは分かる。手にとるように。それが何？」にべもなく言う。

「痛みを知り、その辛さを理解出来るのは、愛を知っているからだと思う」

「何故？」

「感情がない者は、他人の感情を理解出来ない。痛みを知るには、相手の身になって考えなければ分からない。それはつまり愛なのよ。人類愛だわ」

興味深いと思ったのか、彼は彼女の傍に寄った。足音はしなかった。「続けて」

彼女は咳払いをひとつした。

「あなたが契約を持ち出したのは、私の感情を理解しているから」そして首を振る。「でも私は契約などできない。理由は分かるでし

よう？」

「でも、少しは僕の言葉に惑わされたでしょう？ 君の心は迷っていた」

「そうね。たしかに迷ったわ」

「ねえ、君は知っているだろうか」

彼は海へと歩いた。しかし水に沈む事なく、水面に浮んでいる。立っている。異様な光景だが、彼女は驚きもしなかった。

「僕は……僕は神によつて造られた。僕らの使命は人を妨げる事。僕らは人と同じく神の僕だけれど、人にとっては最大の敵。君の敬愛する神は、僕という存在を太古の昔から作り出していた。人の敵とする為に。君の敵とする為に」

彼女もまた、海へと歩いた。膝の辺りまで水に浸かり、ドレスは徐々に濡れていった。

「君は僕が怖くない？ 僕は君の敵だ」

彼女は静かに彼を見上げた。「不思議ね、怖くない」眉を上にあげ、目を大きく開けた。「それにね、私があなたに出会ったのは、偶然ではなく必然。きっと神の思し召しなの」

「思し召し？ ……君は事実を知ってもなお、神に祈りを捧げるつもり？」

「ええ」

「何故？ 裏切られたと思わない？」

「あなたの言葉が本当だとしても、私は神の意に従うわ。私が今、生きているのは、生かされているのは、私にも存在理由があるからよ。辛くても苦しくてもちゃんと理由があるの。……あなたもそうよ。あなたにも理由がある」

「理由？」彼は彼女の腕を掴み、引き上げた。彼女もまた海面に浮いた。

「君は苦しみや悲しみに溢れている。君はそれを抱えて生きてゆくのか？ そこに存在理由があるのか？」

「ええ」頷いた。「あなたは何を抱えて生きてゆくのか？」

彼は目を見開いた。「……僕？」

答えを探すが、彼に答える事は出来ない。空っぽだ。

彼女は微笑んだ。その様は神々しくて、彼の脳裏に彼女の笑顔が焼き付いた。

「私は信じているの。冬がやがて春を迎えるように、きっといつか闇は晴れるわ」

「この現状をどう説明するつもりだ」

男は彼を冷めた目で睨み付けた。「これはクレアとやらが乞い願ったわけではないだろう？」

彼と男の佇む先、波打つ闇の海にひとつ、ゆらゆらと黒い物体が浮んでいた。物体はかつて人であった。名をジャック・モアという女の悲鳴が上がった。黄色いドレスを振り乱し、音を立てて海に入る。

「ジャック！」

動かぬものに顔を寄せる。が、血は通っておらず、冷たさが死を物語る。それは恐怖に顔を歪ませていた。

彼は興味なさげに叫ぶ女を一瞥すると、踵を返して歩いていった。
「待て」

フロックコートは風で揺らぎ、首に巻くスカーフは顔をなぶっている。男は杖を彼の喉元にあてがった。

「お前は只では済まないぞ。分かっているのか？」

「分かっている」

「お前の行動は逸脱している。待つのは“無”だ」

「分かっている」

「俺はお前を消す為にここにいる。葬る為にここにいる」

「分かっている」

「何故お前は――」

彼は手で男を制した。

「これをクレアに届けたい」彼の手の中で光るのは赤い宝石。ピジョン・ブラッド。

「これで彼女は家に戻る事が出来る。元の生活を取り戻す事が出来る」

「何を言っている！？」男は杖で彼の顎を持ち上げた。「今、何と言った！？」

彼は目を細めて笑った。

「君が声を荒げるとは珍しい」

彼は続ける。

「ねえ、僕らの存在理由は何だろう。僕らの存在理由は何だろう。君は知ってる？」

男は彼の襟元を持ち、顔を近づけた。手は必要以上に力が込められている。

「くだらぬ……。知れた事、我らの存在理由は――」

「僕には分からない」彼は寂しげに男を見つめた。「分からなかったよ」

鋭利な青白い三日月が闇夜に浮かんでいた。星は満天を覆いつくしている。彼は見上げて空を目に焼きつけていた。瞬く小さな星を目に焼きつけていた。

風が吹いていた。辺りは木々のさざめく音に包まれている。彼は目を閉じ、耳をすませた。葉の奏でる音を耳に刻んだ。聞こえる音は波を思わせ、寄せては返す海を思った。彼女が言った言葉を思っ

た。

「後悔はせぬのか？」

低く、くぐもった声。嚙れた声。フロックコートに身を包む男は、対峙する彼を哀れみの目で見ている。

彼は口元に笑みを浮かべた。「後悔はしない」

男は頷くと、手を振り上げた。いつの間に握ったのか、短刀を手にしている。

「最後に残す言葉はあるか？」切っ先を彼に向けて言う。

彼は地に膝を落とし、うつむき、黙って首を振ってみせた。

「何も無いのか」静かな声。落ち着いた、悲しみを含む声。「本当に何も無いのか」

彼は顔を上げ、男の目を真直ぐ見据えた。

「嫌な役をさせてしまっね」

「ああ」男はゆっくりと瞬きし、開いて言った。「嫌な役目だ」

「すまない。……そして、ありがとう」

男は切っ先を震わせた。

「まだ間に合うのだぞ？」悲愴に満ちた声。「女の命を奪えばそれでいい。お前は存在し続ける。俺と共に存在し続ける」

彼は再び首を振る。銀の髪はさらさら揺れた。

「彼女との契約は無かった。初めから」

「……そうか」

彼は目を閉じた。

刹那、音と共に意識が擦れ、倒れゆく体を感じた。

彼は目を開け、彼女を想った。手に持つ口ザリオを強く握った。

未来が見えた。やわらかな日ざしに包まれて、微笑む彼女の姿が見えた。闇は晴れたかのように見えた。

目を閉じた。

彼は己の存在理由が少しだけ、分かった気がした。

完

（後書き）

こんにちわ！nicoと申します。この度は拙作お読み下さり感謝いたします。

この作品は企画参加作品です。『写された聖域第一弾』『鬼にも照明を』を検索していただけますと、他作者さまのすばらしい作品を読む事が出来ます。ぜひに！^^

でわでわ、どうもありがとうございました！！

2009.1.9. nico

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943f/>

銀の悪魔

2010年10月8日14時34分発行